
ファントム・ペイン

楠木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファントム・ペイン

【Nコード】

N0450Y

【作者名】

楠木

【あらすじ】

遠い未来、人類が地球から飛び出して宇宙で生活を始めた時代。食物連鎖の頂点にあった人類に天敵が出現した。戦うことができるのは殲滅兵器に適合することができた資格者のみ。アシュヴィンは最弱と呼ばれるチームに所属していたのだがとある男が隊長に就任してから、世界が変わった。

序章

黒い空が広がる。本来空気に満ちて、明るいはずの場所は廃墟と化していた。駆けつけた時、すべてが終わったとき、親友はすでに泣いてすらいなかった。

いや、違う。泣くことすらできなくなっていた。

頬に残る涙の後。いくつも筋を作り、頬を流れてぼろぼろになった衣服にうつすらと赤い染みを残している。

ようやく駆けつけたときにはすべて終わっていた。

親友はたった一人ですべてを背負ってしまった。

結局、何も出来なかったと打ちひしがれたのは自分だけではなかった。そこにいたすべてのものが感じた。誰もが目の前の光景に目を奪われていた。

すでに原型も留めていない、巨大な兵器を前にただ親友は見上げていた。

折り重なるそれは、完成されたオブジェクトのようで、青白い非常用の明かりに照らされてやけに冷たい。作り物めいた腕。二の腕から先はない。広がっている黒い水の塊。辛うじて動いている重力制御装置によって、そこに人がいたのだとわかる。

口が、からからに渴いていた。

何か言わなくては。そう思った。しかし幾度か口を開けては、閉じる。

彼を見て、なお何か口に出来るのか？

心の中でせめぎあう言葉。何も、言えない。何も言えるはずがなかった。

囁きにもならない呼び声は彼に辿りつく前に空気に溶けて消えた。

嗚咽が聞こえた。

彼が泣いているわけではない。

彼がこんな状態になっても泣いていないから、だから他のものたちから嗚咽が洩れる。辛いのに泣かない。自分達に泣く資格はない。だが、溢れてくる熱い雫は止まらない。

「……」

このままではいけなかった。

わかっている。

誰かが役目を担わなければならない。ならば自分以外の誰がこれを背負えるだろうか。

誰にも、譲りはしない。

「……、司令室の、早急な復旧を」

かすれていた。

ようやく出た言葉は、慰めるものではなかった。

非難する強い視線を背中に感じて、一歩足を踏み出す。

「……ご指示をお願いしますか？」

親友の視線が、動く。

緊張？ この胸が不整脈に波打つのは。

違う。これは不安だった。

明るかった、誰より前を進んでいた。引っ張ってくれた。救いあげてくれた。自分の光だ。

そんな相手が、今は意志の乏しい、不思議なものを見る目で自分

を見つめる。現状のことすら把握出来ていない。

「……まだ、終わってはいけないんでしょう？」

「そう、だな……」

反応を示した。

小さな喜びが胸をよぎる。

同時に得体のしれない焦燥感。何かを見落としていると、不安は急激に心を蝕む。ぼんやりと見つめながらも、彼はゆっくりと動き出す。小さく、呟く声が聞こえた。

「……終わって、ない……のか」

間違ったのだろうか。

その声を聞いたとき、信じてもない神に祈りたくなった。

しかし、一瞬の後悔を待ってくれるほど、時間は無限にあるわけではない。

普段の動きではないといえ、親友が動くとそれまで金縛りにあっていた仲間もぎこちなく動き出す。それぞれが散って、先ほど自分が下した命令を忠実に実行に移して行く。

親友も、どうにか動きだした。

笑って送り出せるはずもなく、かといって、このままこの場にとどまらせることも、どちらも望んだことではない。

しかし、今、彼を手放すことはできなかった。

親友同士というそれだけの関係なら……。

しかしそのわずかなためらいも、あわただしく報告に来た部下によって打ち切られることになる。

このときの自分の選択をのちほど、死ぬほど後悔することになる

と全く気づいていなかった。

やる気のない男

世界は人間の天下で永遠に続くと思われていたところから激変していた。

科学と呼ばれる技術は発達を続けたが一方で多大な破壊も招いた。その最たるもので温暖化と呼ばれる現象だ。海水面は上昇し、かつて大陸と呼ばれていたものは海中に没したらしい。らしいというのもそれはすでに遠い過去で現存しているものを見ることは出来ない。現在は見ても青い水の固まりがどこまでも広がっている光景でしかないというからオドロキだ。ちなみにそんなものを見て喜ぶ奇特なやつもいるらしい。

しかし人類が減じる事は、まだ、なかった。急激な気候変動は人類を脅かしはしたが、それでも人類は次なる世界で強かに生き延びたのだ。

温暖化が始まり異常気象に襲われたその頃の人類は、英知を結集して地球と呼ばれるゆりかごから飛び出した。広大な宇宙に移り住んだのはいつのころだったか。

現在、人類は大気につつまれた星ではなく、大気を内包する巨大な長円形のドームで生きている。残念ながら一般人にドームから出ることは許されていないが、数千と連なったドームが暗い空間に浮いている姿は実に不気味だ。巨大な繭が大量に浮いている。あまり見えていて気持ちいいものではない。

ときおり波と呼ばれる振動現象でドームは位置を様々に変えるが、基本的に地球の周囲に多く漂い浮いている。

一般人はドームの中で一生を終え、そのことに疑問を抱く余地もない。太陽は相変わらず存在し、水は豊富な地球がある。宇宙で暮

らすために必要な科学力を人類はすでに手に入れていた。

一般人とはドームで暮らし、そこで仕事を得て一生を終える人間のことだ。ではそれ以外の人間がいるとすれば、何をしているのか。

すなわち、人類を襲った災厄は何も人間が引き起こしたものでけではなかったということだ。いや、言い方を変えよう。これはあくまでも対処できる災厄であつたのだと思い知らされた。

最悪の災厄は、人類が宇宙に住みはじめて久しく経つたときに出現したと言われている。

人間を食物とする巨大生物の出現であつた。

人類を食用とする生物が、もともと宇宙空間に存在していたのかそれとも人類が宇宙へと活動範囲を広げたために出現したのかは、解明されていない。だが、人類を守ってくれていた地球というゆりかごに戻ることは不可能であり、生活圏を宇宙空間に移していた人類ができた選択は二つ。

一つはその生物の食糧よろしく食われてやること。その生物は単体で行動するのか、一定の周期で活動することは初期に判明していたことだった。一度欲を満たせばしばらく襲われることはない。その周期が一週間なのか一年なのかは個体による。まさしく運を天に任せる選択だ。

そして、もう一つが迎撃行動にうつること。当然ながら人類滅亡を受け入れられるはずもなく、人類が選んだのは後者であつた。当時の技術力から考えるとオーバーテクノロジーと呼ばれる、兵器の開発ができてしまったことも一因と言えよう。

それが、最初の殲滅兵器^{シヴァ}の登場であつたと言われている。

藍色の髪の方がひょいと姿を現すと、機体を整備をするためにオレンジ色のつなぎを着ていた男たちが数人いぶかしげにこちらを見た。

ひらひらと手を振って見せたが、眉を寄せられる。まあそうだ。不審人物がいたらそう思うわな、と代わりに左腕につけていた識別証を見せた。グリーンの溶接された腕輪が、身分を証明してくれる。とたんに直立不動で敬礼をされて、少しだけ居たたまれなかった。

「あの、何かご用でしょうか！」

「悪い。ちょっと見学してただけなんだ」

「見学、ですか……」

「ああ。邪魔したな」

気を使われそうになったところで退散した。そういうのは好きではない。司令室の位置はどのドームだろうか似通っているし、迷ったわけではない。

「……」

くしゃりとポケットに突っ込んだ白い紙を目の前でひろげた。興味がない、のだが辞令では抗いようもない。いや、抗うほど気力がない。だからといって積極的に参加したいわけではないから、こうして現実逃避をしているわけで。

「俺なんぞを、よく使おうと思ったもんだぜ」

は、と笑みが漏れる。

上層部の目的は明確だ。言うまでもない。目をつむれば思い出せる。結局、ここから逃げ出すこともできない。逃げ場所なんて、ない。

「あーあ……めんどくせえ……」

男が格納庫から姿を消して十分も過ぎないうちに、今度は怒りに顔を赤くした女が飛び込んでくることになり、結果整備員たちは二度驚くことになった。ふんわりとした金髪がゆるく、肩のあたりで弧を描いている。瞳の色は青。一見すると美少女だったが残念ながら鼻息荒く、まるで汽笛を吹いている機関車のようなだった。

「どこに行ったのよ！　うちの隊長は！」

「ど、どうしたんですか？」

「隊長って……、うちのチームには今隊長いませんよね？」

整備員がかわるがわる告げると、きりりと凛々しい眉がさらに吊り上がった。

「だから！　その隊長の就任が今日なのよ！」

時間は少々巻き戻る。

いらいらと爪を噛んでいるのは、メンバーの中で最年少の少女だった。

「マリエル。せっかくきれいな爪なのに噛んではいけないよ」

金髪が苛立ちと比例するかのように目の前で揺れているのに耐えられなくなったのだろう。なんとか落ち着かせようと銀髪の青年が立ちあがる。

「なんでロイはそんなに冷静なのよ！ これで三時間よ！ 三時間迷ったのかと思ったけど、きちんと時間通りに船は到着しているし！ このドームまで来ているのは間違いないってわかってるの！」
「もしかしたら、その隊長殿……も困っているかもしれないし」

ありえないと思いつつ、繰り返している弁解をもう一度繰り返した。一度や二度ならその理由で納得したかもしれないマリエルも、さすがに十五回を超える同じやりとりを繰り返すつもりはなかった。

「相変わらずお人よしだわ……。いい？ ロイくん。ここまで遅刻するなんてこの狭いドームではありえないと思わない？ ほかのドームと比べて、迎撃用のこのドームなんてそれこそ千人も住むくらいしか規模がないのよ！ 壊滅的な方向音痴でもない限り、ありえない！」

ねえ、とマリエルが首をめぐらせると、一人悠々自適に本を読んでいた少年が視線すら動かさずに答えた。短く切った茶髪と黒い瞳。寝そべって完全にリラックスしている。

「面倒。ねえ、部屋に戻っちゃダメ？」

「カスガ！　きつと、もう少しですつて」

さらにロイが慌てたが、カスガもマリエルもマイペースだった。

「むしろカスガにとってはイイこと尽くめなんですよ。訓練を公然とさぼれるなんて滅多にないんだし」

「ま、マリエル、そんな風に言っちゃダメだよ。さぼりたいとか……よくない」

「事実よ。ほら、見て御覧なさい。カスガは聞いちゃいないわ」

ふん、とマリエルが鼻を鳴らす。普段であればカスガは一切反応しないのだが今日に限ってはじろりとマリエルを見据える。

「ねえ、ちょっと黙ってよ。さっきからうるさくって本に集中できないじゃん」

「……何、この言い分。ムカツときたわ。ちょっとロイ、相手してよ」

「……マリー、八つ当たりは構わないけど、ほら、あと少し……かもしれないから、おとなしくしておこうよ」

もし、と続けようとした言葉は、かぶせられたマリエルのセリフにかき消される。

「あと少しが本当ならいいんだけど、あたしの勘がもっとかかるって告げてるわ。体動かしましょ。それが無理ならせめて本とか暇つぶしになるものがほしいわ！」

マリエルの勘はよく当たる。そしてロイも自分の弁解に無理が出ているのはわかっている。というか、そもそもなぜロイが必死になつて二人のためにあれこれ言い訳をしているかもわからなくなつて

きた。

「待機命令が出てるからここから出るのはまずいよね」

「ね。ほら、相手して。広いから大丈夫。組手くらいならいけるわ」

「マリィ……式典用の服を台無しにしちゃうかもしれない、し」

新隊長の就任式ということで、普段以上に装飾のある衣装をまとっているのは全員が同じである。

「……今日は粘るわね。いつもだったらとっくに相手をしてくれているのに」

「……私もたまには粘ります」

「問答無用！」

ぶん、と音がして、柔らかな足がによつきりと式典用のきわどい短さのスカートの中から覗いた。ああ、とロイは顔を赤くするわけでもなく、ただ淑女らしからぬマリエルの行動に天を仰いだ。

直後、ばん、と音がした。マリエルの渾身の一撃は、カスガが投げた本を蹴り飛ばして壁にたたきつける。直後、異音がピーピーと鳴り響き、壊れた。

「うるさいマリィ。っていうか、ロイに手を出すな」

「都合のいいことだけ聞こえる耳をしてるくせに、イイ反応してるじゃない！」

「ああ！ カスガ！ それ、最新の端末だったじゃないですか！」

ロイの悲鳴は二人とも無視である。

「馬鹿でかい声が面倒。苛立ちが面倒。っていうか、あんたらしくないし」

壊れた本には目も向けずカスガがのろりと立ち上がる。

「はあん？」

「さっさと部屋から出て探しに行けばいい。悪いのは遅れた新隊長と、連れてこれないアシュ。いつものあんただったら、もう行ってる」

「……それもそうね」

マリエルの決断は早かった。

「ああああ！ カスガ、なんてことを言っちゃうんです！ マリエルのことだから出て行っちゃいま」

「もう行ったよ」

三時間耐えたのだ。彼女にしては我慢したほうだ。そう考えることで少しでも自分を慰めようとしたが、ロイはあとの騒動を思っ頭を抱えた。

「ああああああ……アシュ……すいません。私では無理でした」

ここにはいないリーダーを思っロイは心で涙を流した。

「だからアシュが悪いんだって。ね？」

天使のような笑みを浮かべてカスガがぽんとロイの肩をたたいた。うっかりそれにほだされそうになる。

「カスガ……」

「僕らも部屋に戻ろう。おなか減った」

「……食欲ですか」

「うん。マリーが先に暴走してくれてよかった」

「……はあ」

確かにおながすいたなあ、と思って、結局カスガと共に部屋に戻るあたり、実はロイも大差がないことに突っ込む人物は誰もいなかった。

アシュヴィンは足早に廊下を進んでいた。すれ違う者はおらず、ただ焦りだけが積もっていく。

普段であればチームで行動を原則としているアシュヴィンがほかの三人を置いて単独行動をとっている理由はひとつである。本日付で隊長に就任すべき人物が、いまだ到着していない。

「港に迎えに行った時間は、間違っていないよな」

そもそも几帳面なアシュヴィンが間違えることはまずなかった。ということとは、非常に珍しいことに今回隊長に就任する人物は方向音痴だということだ。

人類が暮らし始めてからドームはほとんど機能が同じだ。特に居住区域に関しては住んでいる人間の好みや国の特徴が出る場合がほとんどだが、アシュヴィンたちが暮らしている特別区には違いがないに等しい。

当然だ。襲ってくる化け物相手に、迷いました、という情けない言い訳が通用するわけもなく、また対応できる人間は限られていた。

殲滅兵器^{シヴァ}の登場から数十年。最初の迎撃成功から四十年ほど。近接攻撃特化型、防御特化型など多くの兵器が開発されたが、搭乗できる人間の条件は変わることがなかった。

すなわち、殲滅兵器^{シヴァ}をはじめとする兵器に適合できる人物は三億人ほどいる人類の中でたった一握りの人物たちしか持ち得なかった。

未だ殲滅兵器^{シヴァ}がオーバーテクノロジーだったと言われる要因のひとつが、この資格者を選ぶというところにある。何が条件なのか未だに詳しく解明されていないというのだから驚きだ。現在、資格者ではないだろうか、という推測を立てることはできても、人為的に資格者を生み出すことはできていない。

殲滅兵器^{シヴァ}に適合する人間が存在している。極論をいえば、身長体重血液型誕生日が完全に一致している人間が二人いたとしても、選ばれる場合と選ばれない場合がある。それくらい、ランダムに資格者は選ばれた。

結果、資格者となった人物は否応なく最前線へと送られ、自身の能力に最も適合する兵器を与えられ戦うことになる。

現在しているチームは十二。ひとつのチームが二百人程度で構成され、交代要員およびサポート要員も含め各チームにひとつずつドームが与えられる。居住型ドームに対し、迎撃型ドームと呼ばれる武装しているドームだ。

アシユヴィンたちのチームは、十二チーム中、最弱と呼ばれている。

「……マリエルたちがおとなしくしてくれていたらいんだけど……」

…」

暫定的に現在チームの責任者はアシュヴィンである。ほかに担当できるものがないという現実から、きりきりと痛む胃を押さえながらアシュヴィンは走る。

そのとき、通信機が音を立てた。ぴ、と腰に下げていたパネルを開くと声が聞こえる。

「まだ見つからない？」

「リリさんのほうは？」

「コンソールに反応なし。識別信号、登録してもらってないから当然だけどね」

「けっこうみんなに声をかけてもらってるんだけどな……どこに行っただけでしょうね、彼」

チームの中で見慣れない顔があれば、一発でわかる。アシュヴィンは、実働部隊以外のメンバーに声をかけて探してもらっていた。特に司令室にいるメンバーもアシュヴィンと同じように焦っているはずである。

「あああ！ やっぱり新隊長なんて面倒なんじゃない！」

「まあまあ、リリさん」

「アシュ！ あんたは嫌じゃないの！」

リリの言い分もわかって、アシュは苦笑した。

「士官学校だかなんだか知らないけど！ 上からの命令だから仕方ないけど、頭でっかちのエリート君とかに来られても困るし！ ついでにひっそり就任式行いたいとかわがまま言ってくれたくせにちやんと来ないし！ で、挙句の果てには迷子になるな！」

新隊長、ということは、以前このチームを束ねていた人物がいなくなっただけを示している。それについてはアシュは言及を避けた。あまり思い出したくないからだ。

「経歴が真っ白ってあたりもくさいんだよね」

「そうなのよ！ 絶対何か問題児なのよ！ 適当にうちにやっておけばいいや、とかそんな感じかもしれないじゃない！」

最弱。十二チームしか存在しないのは、単純に殲滅兵器の数が六十体弱しか存在せず、またその修理に多大なる費用が掛かり大量生産が望めないことにある。

どうやって作成されたか、また誰によって最初の殲滅兵器シヴァが作られたかは謎とされていた。過去、強力な兵器はその設計図すら秘匿とされていたため、誰にも明かされず、また元を質すことができないものの開発されてから数十年が過ぎていればしかたないのだろう。

兵器に乗ることが許される資格者は、六十人いればいい方だった。それ以外にも資格者は存在していたが、兵器に搭乗ができるほど成長していないか、または年をとって操縦桿が握れないか、はたまた激しい戦闘の末に宇宙の塵となっている。

殲滅兵器自体にも、そして操縦者すらも代えが利かないのだ。

故に最弱と言われるアシュヴィンのチームに、有能な人材が集まることはまれだと言われていた。多くは、もっとも殲滅兵器を抱えているチーム＆gt;ライジャクにとられる。

しかし、その分このチームのみんなを家族のように思っているんだけどな、とアシュヴィンは苦笑いした。

「僕も、もう少し探してみる。……そろそろマリエルが切れ始める

ころだから、リリさんたちはそっちも見てくれる？」

「あの子たちが頼りにならないって、結構な痛手よね」
「体力はずば抜けているはずだからね」

数百人単位とはいえ、ドームの中を探し回るのはなかなか大変なのだ。通常業務も当然ながらこなさなければならぬ以上、マリエルたちが使えないのは痛手だった。

通信を切るよ、と言い置いてアシュヴィンはパネルを再び腰にはめた。

「本当、どこにいるんだろう」

おおよそ、人がいそうなところは回ったつもりだ。人気のないほうに行っただろうか。ここまで目撃情報もあがらないのではどうしようもない。

一度部屋に戻ったほうがいいのか、と思考をめぐらせた。ほんの数秒に満たない短い時間だった。アシュヴィンの心の底からの本音は、あっけない形でかなえられた。

「誰かを探しているのか？」

背後から声をかけられて、固まった。ば、と振り向きざまに距離を取る。気配がなかった。リリと会話をしていたからといって、声をかけられるほど至近距離まで詰められて、全く気付いていなかったなんてありえなかった。

それも当然だ。このドームの中で戦闘に特化しているのがアシュヴィンをはじめとする四人しかないのだから。

「……見ない、顔だね」

「見ない顔だろうな」

その男はアシュヴィンの反応ににやにやと笑って見せた。チームにいるメンバーをほとんど知っているアシュヴィンが知らない人物。自然と答えは出る。

居住まいを正して、尋ねる。

「…………ルシオン・エーンバルド、様ですか？」

「そういうお前はアシュヴィン・セレクトかい？」

名前を知っていたのか、と目を見張る。藍色の髪の子はアシュヴィンよりも年上だった。藍色の髪は短く、金色の目がおもしろそうにアシュヴィンを眺めていた。

十八という年齢は、資格者の中では年長に分類される。そのアシュヴィンより目に見えて上に見える、ということは士官学校上りの隊長就任ではないということだ。

「お探しました。今まで、どちらに？」

「お前が想像してるとおり」

「……迷子になられておいででしたか」

「そりゃ、これから暮らすドームの探検は大事だろ？」

探検も何も、居住区でなければ大した違いなどないだろう、という反論を住んでのところで飲み込んだ。打てば返す。言葉のやりとりに、アシュヴィンは戸惑った。以前の隊長と違いすぎる。フランクすぎるやりとりに、どういう対応を取るべきか迷った。

「就任式の時間は過ぎております」

「わかってるよ」

「……」

「いやいや、そのあたりはめっちゃくちゃ探してくれたみたいだし。」

マジですまないとは思ってる」

「ドームの案内でしたら、就任式が終了し次第させていただきます」
「ああ。よろしく頼むよ」

屈託なく笑ってみせるが、アンバランスな印象を受ける。アシュヴィンの背後を簡単にとってみせたくせに、方向音痴、迷子という言葉を訂正すらずに、だらりとした姿を見せる。

「あー、アシュヴィン？」

「……はい、なんでしょうか」

ルシオン・エーンバルドが新しく隊長に就任するということは、アシュヴィンが補佐をすべき人物だ。できれば友好的な関係を築きたい。

「……なーんでもない」

にか、と浮かべた笑顔が、存外子どもっぽくてアシュヴィンは返答に詰まった。いたずらが成功した、とばかりに些細なことで表情がころころ変わる。

なんとなく、目が離せない。それが、アシュヴィンが最初にルシオンに対してもった感想だった。

やる気のない男（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0450y/>

ファントム・ペイン

2011年10月30日06時23分発行